論　文　の　和　文　要　旨	
論文題目	現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究－テヘランの場合－
氏　　名	吉　枝　聡　子

1.本論の目的

本論文は，現代ペルシア語(テヘラン標準語)について実施したアンケート調査の分析結果に基づき，以下の点を目的として報告を行うものである。

1)回答者の社会属性を含めた，敬語表現の使用実態の把握と傾向分析

2)発話場面と対応した定型表現に代表される，タアーロフの中心的な言語表現に関する使用現状の把握と，それに対する概念規定を含めたタアーロフの位置づけ

3)使用形態および意識面の比較による，一般的な敬語使用とタアーロフに対する概念規定，ならびにペルシア語の敬語行動に対する従来の枠組みの再検討

2.本研究の位置づけ

ペルシア語は，日本語と同様に，敬意の表示に関わる特定の言語形式を有するタイプの言語である。一般にペルシア語では，「丁寧な」またはpoliteに相当する語としてmo'addabやmo'addabāne「礼儀正しい」をあげることができ，その同義語としてbā-tarbiyat「教育がある」，farhixte「学識ある」が与えられているように，「mo'addabであること」はイラン社会では高く評価される行動規範と認識されている。

ペルシア語の敬語行動では，①mo'addabの概念に直接関連する言語行動である，

zabān-e mo'addabāne（以下「一般的な敬語使用」とする）と，②話者が自身の意図を達成する手段として相手と仮想の上下関係を顕示する，タアーロフ(ta'ārof)と呼ばれる，言語を中心とした行動パターンが観察される。これらは，同様に敬語表現を使用するため外形上からは識別しにくいが，一般的な敬語使用では，二者間の社会関係等による制約が働き，受動的な面が強いのに対して，タアーロフは，話者の意志的使用を基本とする点で異なっている。また，タアーロフでは，特定の場面に対応した定型表現が多用され，二者間の双方向性が重視される点が，もう一つの大きな特徴である。

ペルシア語の敬語行動に関しては，Beeman(1986他)，Jahangiri(1980)，Moosavi (1986)などが報告を行っているものの，

1)一般の敬語使用とタアーロフの同一視あるいは混同

2)タアーロフを「上下関係の強調」と規定する位置づけ

3)近年の社会変容に伴う，ペルシア語の敬語変化に対する配慮

の三点で，研究枠組み上の問題が指摘される。これらは，イラン社会の敬語行動の使用実態を含めた現状把握が不十分なことに起因するものである。

近年，社会言語学の分野における敬語行動研究では，Brown and Levinson(1980)の理論を初めとして，言語におけるpolitenessを，対人関係の際にとられる，ストラテジーとの問題として捉える枠組みが主流となっている。ペルシア語の敬語行動に関しては，「一般的な敬語使用」と「タアーロフ」を異なる敬語行動要素と認める枠組みを基盤として，その両面から分析していくことが不可欠であるが，この際には，Brown and Levinsonの理論や，井出(1986他)が日本語の敬語行動研究の立場から主張する，「わきまえ」/「働きかけ」方式による枠組みと必ずしも合致しない点が出てくることが予測される。

以上の研究背景を考慮し，本研究では，ペルシア語の敬語行動に関する基礎的研究の一環として，敬語を，発話の背景にある諸要素を総合して決定される＜心的距離＞と，敬語表現との対応上のルールの体系と捉え，これまで実施されてこなかった，アンケート調査から得られたデータに数量的な分析を施すことによって，その実態を把握し，今後の新たな枠組みについて検討を行うことにした。

なお，調査は1996年10月から11月と1997年３月の計２回にわけてテヘランで実施し，男性100人，女性116人の回答者を得た。本論では，分析の主眼点とする社会属性グループを，①16歳から65歳にわたる被験者を10歳ごとに分けた５年齢グループと，②小学校～高校，短大，大学，大学院以上の４学歴グループに分類している。また，16-25歳代に限っては，テヘラン/地方出身者グループの別を加えた。

3.本論の構成

本論文は，序章，本編である調査結果の分析，まとめの三部より構成される。

序章では，まず現在に至る欧米の敬語行動理論の流れと，ペルシア語の敬語行動に関する先行研究についてまとめ，その枠組み上の問題点を指摘する。

本編は，調査票の質問に従って集計結果を提示し，それに分析を加える形で進める。各設問がねらいとする点は，以下の通りである。

Ｑ１－タアーロフの指標である定型表現の使用現状を把握し，定型表現およびタアーロフのパターンに関する考察を行う。

Ｑ２－一般的な敬語使用およびタアーロフの使用例に対する回答者の印象より，これら二種類の敬語行動に対する意識上の相違を検討し，その位置づけの見直しを試みる。

Ｑ３－心的距離の重要な決定要因である，聞き手の社会属性に応じた，敬語表現の使い分けの現状を提示し，概観する。

Ｑ４－一定の設定場面における，基本的な敬語表現に関する使用実態の把握を行う。

また，第6章では，一般的な敬語使用とタアーロフとの関連性について考察するために，Ｑ１の定型表現の使用頻度とＱ４が対象とした基本的な敬語表現の選択状況について，分析を加えた。

まとめでは，調査を通して得られた分析結果を通覧し，ペルシア語の敬語行動全般の動向を考察した上で，今後のペルシア語の敬語行動研究に対する新たな枠組みを提示し，その方向性について論究する。

4.分析結果の概要

以下，本論文で得られた結果の概要と，その成果について記す。

(1)ペルシア語の敬語行動全体の傾向として，二者間の力関係を基盤とした，従来の「上下敬語」型から，社交上の一手段としての機能を含む「左右敬語」型への移行が生じつつある現状が確認された。

(2)ペルシア語では，タアーロフに代表される上下関係の仮想的強調ではなく，二者間の実際の地位差に基づいて使い分けを行う，一般的な敬語使用が，もう一つの敬語行動型として存在することを確認した。

(3)タアーロフと一般的な敬語使用との概念上の規定に関しては，その使用形態から敬語変化に対する受容度が高いと考えられる高学歴層において，この二種類の敬語行動を意識お

よび使用の両面で区別する姿勢が顕著に認められた。このことは，今後この二つが，機能面での差異がより明確化する可能性の高いことを示すとともに，さらに，ペルシア語の敬語行動に対する従来の枠組みの修正と，本論が主張する，一般的な敬語使用という分野を新たに認めた研究視点の必要性を示唆するものである。

(4)タアーロフの位置づけについては，ペルシア語の敬語行動全体に認められる，上下型から左右型への流れを受けて，従来の「儀礼的な上下関係の強調」ではなく，相手への敬意と同時に，親近感も顕示するパターンを中心とする方向へ向かいつつあることを確認した。

(5) 社会属性グループごとの敬語運用面での差異は，以下のようにまとめられる：

1)性別ーー女性は，聞き手と表現の対応関係が男性に比べて明確で，くだけた側では丁寧度の低い，あらたまった側ではより丁寧な表現を使用する。ただし，謙譲語や高い敬意度を表示する表現については，男性の方が使用頻度が高い。男性は尊敬・謙譲の敬意表示方式には無関係に表現の使い分けを行うが，女性の敬語行動は，謙譲ではなく，尊敬表現によって相手の地位を高めることで，上下関係を表示するという基本的姿勢に立っている。この傾向は，謙譲語を含む敬語敬語全体にわたって男女差が大きい，日本語の敬語行動とは大きく異なる点である。

2)世代差ーー若年齢層と高年齢層の両端の世代で，使用パターン上の相違が大きい。即ち，高年齢層は，くだけた表現を避けて丁寧な言葉遣いをし，定型表現も高頻度に使用する。一方，若年齢層はくだけた形式の表現の使用頻度が高く，心的距離の減少に伴う，あらたまった表現からくだけた表現の切り替えを早い段階から行い，場面に対応した定型表現の使用頻度も低い。ただし，この世代は，敬語運用や意識面がまだ不安定で，なお敬語の習得段階にあることが予想される。

3)学歴差ーー低学歴層と高学歴層による差異が顕著で，高学歴層の使用パターンの特徴は，大学院以上の学歴グループに明確に現れる。低学歴層は，敬語表現の使用に対して保守的で，くだけた表現を避け，謙譲表現や高い敬意を顕示する表現を使用する傾向が強く，定型表現の使用頻度も高い。この点で，低学歴層は，ペルシア語の伝統的な敬語行動パターンを顕著に保つ層といえる。一方で，高学歴層，特に大学院以上の学歴グループでは，敬語表現の適用基準が低学歴層より複雑で，過度にあらたまった表現を避けるが，同時にくだけた側の表現についても使用を控える傾向がある。また，定型表現については否定的なイメージを示し，意志的に使用を避ける姿勢が認められる。この背景には，それだけ強いグループ帰属意識が働いていることが考えられる。

4)地域差ーー16-25歳に限ってテヘラン／地方出身のグループ別を設けた分析では，地

方出身者はテヘラン出身者に比べて，謙譲表現や高い丁寧度を含む，あらたまった表現を選択する傾向が強く，定型表現も高頻度に使用している。また地方出身者は，テヘラン出身者の56-65歳グループと類似の使用パターンを示すことからも，地方では，伝統的な敬語行動がなお残っていることが予測される結果が得られた。

以上のように，本論文は，ペルシア語の敬語行動の実態把握と，これを踏まえた新たな枠組みの提示という点で，十分当初の目的を達成した。この研究によって，今後の継続調査，タアーロフに関する下位分類を含めた調査研究，都市と地方差の解明などの，諸課題が新たに浮き彫りとなった。本論文は，ペルシア語の敬語行動に関して，数量的な面から実態報告を行った最初の研究例として，今後の研究の基盤となる一次資料を提供するものであり，さらに，今後のイラン社会の敬語行動研究に対する方向性を示す，最初の里程標となるものである。